

御影堂

永観堂の最大の建物である御影堂は、浄土宗の創始者の聖地であり、毎年4月に法要が行われる。ここの中央の祭壇には、日本における浄土宗の創始者である法然上人（1133–1212）の像が祀られている。左側の祭壇には、法然の主要な弟子の一人であり、西山派浄土宗の創設者証空（1177–1247）の像が、右側の祭壇には、法然上人と証空上人が広く学んだ中国の浄土教の傑出した僧である善導（613–681）の像が安置されている。

また、御影堂には、お釈迦様の弟子16羅漢の一人賓頭盧（梵語：ピンズル：ピンドーラ・バーラドバージャ）の像が安置されている。賓頭盧は神通力をひけらかしたため、お釈迦様に諭された。賓頭盧は悟りを得る前、佛教の教えを広め続けるためにこの世にとどまるように命ぜられた。彼の像をこすると病気が治ると信じられているため、長年に渡って参拝者たちがその頭を撫でてきたので、頭は滑らかで光沢がある。

中央の祭壇（須弥壇）自体は須弥山を表している。須弥山は佛教の宇宙論の世界の中心点であり、お堂の四隅で四天王の彫像が東西南北の四方を守っている。お堂の屋根を支える48本の柱は、阿弥陀様の48の誓い、阿弥陀様を信じる衆生を救う本願を表していると言われている。

永観堂の御影堂は何回も再建された。応仁の乱（1467–1477）で焼失した後、1497年に後土門天皇（1442–1500）によって再建され、1600年と1912年にも再建がなされた。お堂は禅と伝統的な日本様式を折衷させ、櫟の木で作られている。